江戸時代の京都の指物師と御所のかかわり
RELATION BETWEEN CABINETMAKER AND IMPERIAL PALACE
IN KYOTO OF EDO PERIOD

丸山俊明*

Toshiaki MARUYAMA

In an architectural space of Japan, there was a part supported by the traditional craft. However, it was basic that the traditional craft handed down many of technologies by the home. Therefore, material that showed the system of production, the form of business, and the relation to the society was a little and the previous work was also few, and consequently little. In Kyoto of Edo period, in such and this thesis take up the material spread to the house of the cabinetmaker to make the imperial palace a customer. And, it is clarified to the cabinetmaker of Kyoto to have divided into the person who always goes in and out to the imperial palace and the person who was tendering at each work.

Keywords : *Kyoto, Cabinetmaker, Imperial palace, craft, Fine and applied art*
京都、指物師、御所、工芸、美術工芸

1. はじめに

日本の伝統的な建築空間は、例えば古代の寝殿造で鋪設具の配置が重要な意味を持ち、大臣大饗等の年中行事で役割を果たしたことが川本重雄氏の研究によって明らかにされているように^{注1)}、多くの伝統工芸が関わって形成された。そうすると、直接的に建築に関わった大工等の職人の営業形態を伊藤鄭爾氏や日向進氏らが研究課題とされたように^{注2)}、工芸職人の生産体制や営業形態、社会的な位置付けも、日本建築史分野においても検討すべき課題と思われる。

しかしながら、工芸品には建築系道具雛形について永田恵子・岡本真理子・河田克博・麓和善・仙田満・内藤昌・高木真人ら各氏の精緻な成果があっても^{注3)}、工芸職人の先行研究は管見に入らない。

この状況の背景には、関連史料が少ないことがある。近世社会には相当数の工芸職人が予想されるが、多くの家蔵文書がある京都でも、工芸関係の一次史料は少ない。その中で、御所の「御菓子御用」の虎屋の社史^{注4)}に、「寄宿免除」を受けた江戸時代の営業形態が紹介されている。また池田好信氏が京都府立総合資料館歴史資料課の『御用砂子屋美濃地仲間文書』に関する史料紹介^{注5)}では、砂子（金箔・銀箔を細かくした切箔の一種）を扱う業者には禁裏御所や幕府と関連を持つ御用砂子屋と、町人相手の平砂子屋がいたこと等が明らかにされている。しかし、安道永氏が二次史料によって絵師の居住動向を検討されたように^{注6)}、公開された一次史料の数は限られており、上記課題の検討にはさらなる史料収集と分析が課題であった。

そこに今回、京都府立総合資料館所蔵『船屋（久米家）太兵衛家文書』に関連文書が多数含まれていることが判明したので、本論で取り上げて、京都特有の顧客である御所との関係を検討する。

図1 船屋太兵衛家平面（上段：2階と屋根形状、下段：1階と配置）

同資料館の山田洋一氏によれば、久米家は「船屋」の屋号をもち、当主は代々「太兵衛」の名前で寛永（1624～44）から明治中頃の廃業まで、西堀川通出水通下ルの四町目で禁裏御所や公家衆に白木作りの道具類や御所等の池で使う「御船（みふね）」を調進する指物師として営業していた^{注7）}。この船屋が残した史料群が『船屋太兵衛家文書』である。多様な内容を見るが、例えば明治初頭の沽券状や指図には間口も裏幅も「間口三間一尺五寸」で「裏行拾式間式尺四寸」の敷地に「瓦葺き二階建」の「本宅」や「木建小屋」（材料置場の可能性があるが正確には不明）の配置や、前庭をもち坪庭・玄関はない間取りが読み取れる（図1、図中（）内は筆者）。つまり二条城近くで（図2★位置）、典型的な町家が営業場所であったことが分る。

* 住環境文化研究所 学博

Culture and Life Environment Laboratory, Ph. D.

また明和3年(1766)12月6日に「沽券改」を受けたことを記す史料(「家屋敷事」)や、明和4年(1767)11月にも「沽券改」を受けたとする史料(「家屋敷事」)にも、同じ場所に「壱軒役、表口三間壱尺五寸、裏行拾貳間貳尺四寸」とあり、少なくとも江戸後期の敷地形状に変化はなかった。もっとも明治新政府宛の「家屋敷之事」には「壱ヶ所半軒役、西堀川通出水下^ル四町目東側、表口三間壱尺五寸、裏行六間半」とあるが、これには以下のように記されている。

右者寛永度上洛之節、当町道幅御取広ヶ付、西側居宅表側^ニ而三間通^リ建物取払被仰付、往還^ニ相成依而、右以来居宅向ひ地先川端江建物仕候義御聞濟被成下追々奉願、既在之建物仕所持罷在候、然^ル処、今般右地所表側^{ヨリ}川縁迄、沽券地^ニ御赦免被成下候様奉願候、如願之通、御聞届被成下即書面間数之通^ニ而向後半軒役相勤所持仕度、新沽券状^ニ御割印奉願上候、船屋太兵衛寛永3年(1626)8月の將軍家光上洛時、船屋の前の西堀川通が拡張とある。杉森哲也によれば、翌9月の後水尾天皇の二条城行幸で行幸経路になるので^{注8)}、それとの関係が想像される。そして表側三間を失った船屋は背面の堀川側に建物を建て、維新後の新政府の沽券改において所有確認を願ったのである。内容の真偽や申請結果は明らかでないが、遅くとも寛永期には船屋が当地に居住し、一応寛永以降は敷地形状に変化がなかったことを示す史料となる。また寛文5年(1665)の『京雀』^{注9)}に「ほり川通、ほり川四町め、此町は桶・井づつ・つるべ・水船などをつくりてあきなふ」とあり、貞享2年(1685)の『京羽二重』^{注10)}にも「西堀川通、此通諸職物、桶、井筒、水船類」とあって、船屋の位置する辺りは確かに「水舟」と称される船や水関連の指物を扱う指物師の居住地とされている。

もっとも『船屋太兵衛家文書』では、水舟の修理・新調費用の記録や図面に限らず、朝廷関係の婚礼調度や、龍吐水等の消防道具を入札した際の記録、或いは箱や膳といった指物絵図も多く含まれており、それよりむしろ、大部分が御所関係である点が特徴的である。

江戸時代の御所は、「築地之内」と称される地域に禁裏御所(天皇御座所)や仙洞御所、女院御所が置かれ、周囲は公家屋敷群が埋めて、それらの土堀や九門が周辺の町家群と隔てた。京都の芸職人には最重要の顧客であり、特に関係の深い者は御所から、町人義務の公役を免除される「諸役免除」や、上洛武士の受け入れ義務を免除される「寄宿免除」という特権を付与された。筆者は「諸役免除」を受けた町人が火消人足への屋根提供義務も免れるとして自宅の大屋根軒先に長板を掲げたこと、これに対し消防組織でもある所司代・町奉行所体制は「御札改」を繰り返し、根拠を失った者から剥奪、代わりに入った者は菊紋入の御用提灯付与に変わる場合が多かったこと、ただしそれも御所役人が火災時に吊ることを指示していて火消人足の拒否機能は残った可能性が高いことを指摘した^{注11)}。徳川政権が命じた町人義務を、一部でも御所が免除するのは京都特有の二重行政であり、それを受けた芸職人も特殊な立場であったことになる。そして『船屋太兵衛家文書』には提灯付与に関する史料があるので、本論では船屋と御所との関係を示す史料を中心に検討し、御所が存在する京都の指物師特有の営業形態の一端を明らかにする。

2. 安永期の史料にみる船屋と御所の関係

安永3年(1774)8月、徳川幕府は朝廷の不正経理を糾弾して、地下官人40人を処分、経理に関わった京都代官小堀数馬邦直も叱責

した。『船屋太兵衛家文書』の中にも、この事件について、以下のよう

に記す紙片を付けて一括りにした史料群がある。

安永二年巳十月十五日、御所様役人ほうとうの節、西役所山村信濃守様へ召出され、同月廿三日返答案紙書面
処分前年の安永2年(1773)10月、船屋太兵衛は西町奉行山村信濃守良旺から召喚され、御所役人の放蕩に関し尋問を受けたらしい。同月23日に返答書提出とあり、御所出入の芸職人側も調査対象になったことがわかるが、船屋は処分実施の安永3年8月に疑惑が晴れたとの書き込みを残す(「午八月廿六日七日両日万事此義相済」)。

そしてこの史料群には、船屋と御所役人との関係や業務経歴が窺える。まず西町奉行への返答書の可能性が高い「就御尋以書面申上候」には、「走・水船・指物商売之者」と自称して以下を記している。

一、私儀、禁裏御修理方、仙洞御所御修理方、新女院御所修理方、右之通、臨時御用相勤申候所、禁裏御所、去辰年中、御所臨時御用代銀、私受取節百目^ニ而九分一匁不足御座候
仙洞御所、去辰年中、御所臨時御用代銀、私受取節百目^ニ而九分一匁不足御座候、新女院御所、去辰年中、御所臨時御用代銀、私受取節百目^ニ而、九分一匁不足御座候

一、定式御用^ハ三御所共相勤不申候

禁裏・仙洞・新女院の三御所の「臨時御用」を務めているが、「定式御用」は務めないとする。『船屋太兵衛家文書』に御所関係の入札記録が多いことを考え合わせると、入札を経た業務が「臨時御用」であり、随時受注の特命業務が「定式御用」と推定される。よって御所御用の指物師は随時受注と入札参加に分かれ、御所との関係がより深いのは前者、当時の船屋太兵衛は後者、と考えられる。また金額については、より詳細に記す以下の返答書が残されている。

禁裏御所様御用代銀高		
明和三年戊七月 ^{ヨリ} 半年高、銀		三拾八匁
亥年 ^ケ 年 ^ノ 高、銀		三百目壱分
子年 ^ケ 年 ^ノ 高、銀		百九拾目壱分
丑年 ^ケ 年 ^ノ 高、銀		七拾貳匁六分
寅年 ^ケ 年 ^ノ 高、銀		貳百六拾八匁八分
卯年 ^ケ 年 ^ノ 高、銀		貳百七拾壱匁六分
辰年 ^ケ 年 ^ノ 高、銀		一貫貳百貳拾九匁五分
巳年 ^ケ 年 ^ノ 高、銀		三百五拾壱匁五分
是迄都合、貳貫七百廿貳匁二分		
仙洞御所様御用代銀高		
明和七年 寅年 ^ノ 高、銀		拾四匁
卯年 ^ノ 高、銀		壱百五拾壱匁九分
辰年 ^ノ 高、銀		参拾五匁五分
巳年 ^ノ 高、銀		廿五匁貳分
是迄都合、 貳百貳拾六匁六分		
右之通是迄都合銀子頂戴仕相違無御座候		

これをみると、町奉行所への召喚の前年(辰年、安永元年1772)に船屋と禁裏御所との取引が一桁大きくなっている。そのためなのか、取引額や御所役人との関係についてさらに記す返答書がある。

一、禁裏御所、辰年之年中御用高一貫貳百九匁五分
右^ハ百目^ニ付壱匁程ふそく御座候、尤少々過銀之在々之時も御座候、何連^ニも其俣^ニ修理職御役所^ヘ相納御通、表銀高、都合其時請取申候

一、仙洞御所、辰之年御用高三拾匁七分、右ハ式分程不足在之、過銀無御座候

一、新女院御所辰年中御用高、四百三拾六匁七分、右ハ不足并過銀等一切無御座候

右何連御所役人中ハ年中差定リ送物ハ、二季ヲ祝儀、極月牛蒡又ハ鱈本或ハみぶな之類遣申候（略）平生ハ一向音物等遣之不申、且又暑中之音物等も遣不申（後略）

禁裏御所に対し「百目」つまり 100 匁につき 1 匁「ふそく」と記す正確な意味は明らかでないが、受取り過ぎを意味するらしい「過銀」と対比されるので、支払関係に多少曖昧な部分を認めている。また御所役人との贈答関係については、祝儀（「二季ヲ祝儀」、1 年に 2 回渡す意味か）や 12 月の牛蒡・鱈・壬生菜等を届ける程度とし、入札参加資格を持つだけの「臨時御用」の船屋でもこの程度の贈答は行っていたことが分かる。それでも普段は贈物（「音物」）はしないと記すので、この程度は社会常識の範疇であったのだろう。

また御所との関係が何時から始まったのかにも、返答書がある。

就御尋年恐口上書 指物商売

一、禁裏御所様江御出入仕、数代御用相勤来リ候由、申伝承知仕候得共、何之頃ヨリと申年月難承知御座候、貞享・元禄以来御用寸法・雛型等所持仕罷在候、御用相勤来リ候

一、仙洞御所様江御出入仕、数代御用相勤来リ候由、申伝承知仕候得共、何之頃ヨリと申年月難承知御座候、元禄以来御用寸法・雛型等所持仕罷在候、御用相勤来リ候

「右申上候安永三年頃、天野近江守様御役人中様」との書き込みがあり、所司代配下で禁裏付の幕府役人（天野近江守正景）への返答書である。禁裏御所・仙洞御所とも出入開始時期は不明としながら貞享・元禄期には記録ありとし、船屋の臨時御用は遅くとも 17 世紀末に始まり、事件までに 1 世紀近く経過していた。そして調査対象の安永元年に取引額が増大した船屋であったが、疑惑は晴れたから今まで通り御用を務めたいと願う「年恐口上書」が残っている。

一、私義、去ル八月西御役所へ被為召出ニ而、私義濟方何之御懸念無之趣ニ而過料等も不被仰付相済罷帰リ申候、勿論其以、不相替御用被為仰付、相勤来リ居申候義ニ御座候、何卒御慈悲を以不相替御用被為仰付被下置候ハ、難有可奉存候、以上、安永四年未正月廿二日、舟屋太兵衛

処分翌年の安永 4 年（1775）正月 22 日の文書である。これは同日に「仙洞御所、古居七之助・西川是蔵・山本小左衛門」から、これからの御用を希望するのか否かを届け出るよう命じられ（「去ル午八月御所向役人御仕置被仰付候以後西御役所へ被召出、濟方之趣且又過料被仰付趣、又者其儀ニ不及候趣勿論、此以後御用相勤可申、或否之義以今明日中可被申出候」）、これに答えた文書である。このように連座を免れた船屋太兵衛は、さらに翌月の安永 4 年 2 月、「仙洞御所御役人中」へ以下のような「年恐奉申上口上書」を提出している。

一、私儀、御修理職方ニ而、水舟・走り・指物類御用被仰付候者ニ御座候、此度御値段相改メ、引下ケ候様被仰付奉畏候、私相勤申御用、定式御値段と申義無御座候ニ付、是迄御用度々積書差上、御吟味之上被仰付、相勤来リ候、猶又此以後御用之節ハ御値段厳敷引下ケ積書相遣候、以上

御所の「御修理職方」に「指物御用」で出入する者とした上で、「御値段相改メ、引下ケ」命令に対し、「是迄御用度々積書差上、御吟

味之上被仰付、相勤来リ候」として、自らの御所御用に「定式御値段」はないとする。それが「臨時御用」の営業形態とすると、先にも推定した様に随時受注の特命業務が「定式御用」で、そこには「定式御値段」があったことになる。それへの引下げ命令は、不正経理に流れた上積み分を排除する御所役人の目的が推定される。

以上のように船屋太兵衛家は、入札資格を持つ臨時御用の指物師として 1 世紀近く三御所へ出入し、御所役人と社会常識の範囲で関係を持っていた。なお事件後も、御所付の幕府役人による出入業者の監視は続いたようで、安永 5 年（1776）11 月の「天野近江守様御役人中」宛の「年恐向上書」にも次のように記されている。

一、私儀、御所様江前々ヨリ御出入御用等相勤来リ候得共、私居宅表ニ御用札并暖簾等一切無御座候、依之年恐御断奉申上候、以上、安永五年申十一月

御所との関係を強調する札や暖簾を表に出していないか問い合わせがあったようで、使用していないと返答している。それでも『船屋太兵衛家文書』には、その後も船屋にとって三御所が重要な顧客であったことを示す文書が残されているので、次節で取り上げる。

3. 臨時御用から定式御用へ、立場の変化を窺わせる史料

文化 4 年（1807）8 月に船屋太兵衛が御所役人へ宛てた「年恐口上書」には、次のように記されている。

御道具木地方御用、私儀前々ヨリ被為仰付相勤来リ、難有仕合奉存候、然ル処、今般親王様御用木地方、不相替為仰付被下置候様、奉願上候、何卒御慈悲ニ仕、右願之通御済被下被為仰付下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

船屋は以前から「御道具木地方御用」つまり指物の御用を務めているとし、同年の「親王（天皇の兄弟・皇子）」に関わる御用も、それまで同様に受注を願っている。ここで注意すべきは、この内容は入札参加資格だけを持つ臨時御用というよりも、特命業務を随時受注する定式御用の立場のように読み取れる点である。そうすると、この時期までに船屋は定式御用の立場を得たことになる。その経緯を伝える史料は現時点で見当たらないが、この頃から幕末にかけて、ほぼ同様の文書が数多く残されている。例えば文化 11 年（1814）の「御修理職御役所」宛の「年恐奉願上口上書」にも次のようにある。

御出入御用向共被為仰付、御慈悲之上、年恐代々無滞相勤、冥加至極難有仕合奉存候、然ル処、御息所様御出入御用向、先例之通ニ為仰付被下候様奉願上候、年恐御憐憫を以、右願之通被為仰付被下候ハ、渡世も手広ニ相成、猶又何連も先例在候ものとも候エハ、外聞等迄誠ニ広大ニ御慈悲と難有仕合奉存候、以上

木子■■■丞

木子作太夫

大黒屋市左衛門

松屋新兵衛

■法藤兵衛

桧皮屋貞七

舟屋太兵衛

山崎屋五兵衛

鋳師種兵衛

塗師七郎衛門

■師六兵衛

伊勢屋伊兵衛
瓦師源三郎
永野七右衛門
三年屋与兵衛

一部読取不能の個所があり、またいずれの御所宛かも分らないが、「御息所（皇子・皇女を生んだ女御・更衣）」に関わる御用受注を願っており、やはり定式御用の立場が窺える。また連署者のうち冒頭2名は「京十人棟梁」の流れを引く木子組棟梁^{注12)}と推定され、他の「桧皮屋」「鋳師」「塗師」「瓦師」も建築関連と推定される。よってこれらと連署する船屋太兵衛も、下京を得意場とする木子組に指物師として加わっていたことが窺える。もっとも現時点では他に同様文書が見当たらないので、集団成立の時期や経緯は明らかでない。

以上、船屋太兵衛は、文化4年（1807）の時点では定式御用の立場にあった可能性が高い。この点をふまえて次節では、御所との関係で船屋が御用提灯を付与された経緯や相続時の問題を取り上げる。

4. 御用提灯と非常札の付与

船屋太兵衛が御所から御用提灯を付与されていたことは、例えば天保14年（1843）の町奉行所宛の「乍恐口上書」に読み取れる。

御用と書記有之候

釣提灯壺張

箱提灯壺張

弓張提灯壺張

非常札壺枚

右者、私父太兵衛義、御所様江御出入仕、御常式御指物御用相勤候=付、書面之通、御提灯・非常札共頂戴罷在候处、及老年相勤退身仕、私義相続仕、右御用是迄之通私江被仰付相勤候時、右提灯非常札共其俣御渡下、釣提灯ハ居宅近辺出火之節表釣置、箱提灯・弓張提灯ハ、御用之時、夜分往來之節、相用ひ、非常札之儀ハ、非常之節、持参馳付候様、御役所役人中ヨリ被仰渡候時、御請ヶ上度奉伺、右之趣御聞届ヶ被成下候ハ、難有奉存候、以上、天保十四卯年六月廿日

先代当主の引退を受け当代当主が「御常式御指物御用」を受け継いだとあり、前節で推定した臨時御用から「常式御用」（定式御用と同義）への立場変化が確認される。そして「御役所役人中」から「御提灯・非常札」が「其俣御渡下」され、「釣提灯」は近辺出火の折に「表釣置」、「箱提灯」や「弓張提灯」は「御用」のため「夜分往來」の際に使用、「非常札」は非常時に御所へ「馳付」の際に持参を仰せ渡されたのであるが、これは「常式御用」を務めるがゆえと読める。そして天保14年6月20日に町奉行所へ上記文書で報告、「御聞届ヶ」を願ったのであり、許された後に以下の「御請書」を再び提出した。

御用と書記有之候

釣提灯壺張

箱提灯壺張

弓張提灯壺張

非常札壺枚

右者私太兵衛義、御所様江御出入仕、御常式御指物御用相勤候=付、書面之通御提灯非常札共頂戴罷在候处、及老年相勤退身仕、私義相続仕、右御用是迄之通私江被仰付相勤候時、右提灯・非常札共其俣御渡下、釣提灯ハ居宅近辺出火之節表釣置、箱提

灯・弓張提灯ハ御用之時、夜分往來之節相用ひ、非常札之儀ハ、非常之節持参馳付候様御役所役人中ヨリ被仰渡候時、御請ヶ上度奉伺、戻、御聞届被成下、右御提灯御用之外私用ニハ相用ひ申間敷候而、火事場之儀ハ去ル文化三寅年二月御差出御座候御触有之趣、皆相守右提灯を持猥ニ火事場徘徊仕間敷之旨、此度右御提灯・非常札共返上仕候处、又者代替并変宅其外等之儀有之節ハ其時々御届可申上旨被仰渡候趣、急度相守可申候、依之御請取奉差上候、以上

町奉行所は御用提灯の許可に際し、「火事場」に持ち込まないよう命じたことが分かるが、これと同様の内容を触れた町奉行所の触書は寛延3年（1750）、明和8年（1771）10月、文政元年（1818）2月にも確認され^{注13)}、船屋に限った内容ではない。また同様の相続は『船屋太兵衛家文書』では文政8年（1825）7月1日付の「乍恐口上書」にも読み取れるが、それには、それまで相続時に御所と町奉行所への相続許可申請を行っておらず、御所役人から召喚され申請履行を命じられたとある（「私共心得違仕、代替之儀御届不申上候处、此度御所表江召出御提灯御改（略）是迄代替リ■■■■其外所替之度御届不申上、不埒之断、以来入念可申旨、被仰渡」）。その時の「御請書」の日付が翌文政9年（1826）2月8日まで遅れるのは、町奉行所の許可が遅れたことを示しており、その際に町役人へ西町奉行所への同行が命じられたのも（「西御役所江町役付被召出」）、町役人に責任を連帯させたことが窺えるが、安永9年（1780）2月24日付の西町奉行所宛「乍恐口上書」には、以下の内容が記されている。

一、御用と書記候

釣提灯壺張、箱提灯壺張、弓張提灯壺張

右者私前ヨリ禁裏御所様江指物御用調達候=付、右御提灯頂戴仕罷在候、尤右御提灯頂戴仕候砌、御役所江御断申上置候様、父太兵衛ヨリ承伝ハ罷在候得共、父太兵衛右御提灯頂戴仕置死去仕候=付、年月等控無御座候故、相知れ不申候得共、只今ニ而も私所持仕候間、御所様御用之節相用ひ罷在候、右之際ニ■■■殿宜敷相認メ被下候、西堀川出水下ル町舟屋太兵衛

安永9年（1780）の時点で死去している「父太兵衛」は、文政8年（1825）引退の太兵衛の父親である可能性が高い。そして「父太兵衛」からは相続時に許可申請の必要を聞かされていたが、死去時点で「年月等控無」、おそらく拝領時期等が不明であったため、申請しないまま「御所様御用之節」に用い続けたとの経緯が読み取れる。

それでは、船屋太兵衛が御所から御用提灯と非常札を付与されたのは何時か。天保14年の「乍恐口上書」には「常式御用」の代替と読み取れたが、「修理職方江指上候一札写」に、その経緯が記される。

此度、私願之通、御用御提灯拝領被為仰付、難有仕合奉存候、尤被為仰付候通、平生御用之砌、又者非常罷在候節、是又私居宅近辺出火等=付表=釣リ申候、外一切私用相用申間敷候、右御提灯御威光を以、往來之人ニ対し横柄構敷■■■之仕形仕間敷候、勿論、私用事有之、代リ之者差上ヶ候共、右之趣常々得と申仕置、火元ハ堅ク持参為致間敷（略）

明和4年（1767）4月2日に町奉行（「御奉行様」）へ提出された文書であるが、表題から御所の「修理方役所」へ提出した文書の写しと分かる。そうすると当該史料が現存するのだから、上記安永9年2月24日付の西町奉行所宛「乍恐口上書」に「年月等控無」と記し相続許可申請の不履行の理由とした事と整合しない。また明和4

表 1 「諸役御免除之分」から抜粋した工芸職人

1	烏帽子師	室町福永町	杉本美作守
2	筆屋	室町福永町	筆屋長門
3	御筆御用	河原町一ノ船入町	法橋祐以
4	箔御用	南御霊町	箔屋甚右衛門
5	織物師	大北小路東町	野本久右衛門
6	戸屋主役	烏丸通一条上ル北半町	蒔田左京
7	御装束御用	烏丸通桜馬場北半町	高田出雲
8	荒物御用	十如町	荒物屋市助
9	呉服御用	室町通武衛陣町	八文字屋善兵衛
10	御呉服御用	室町通御池上ル町	三井三郎右衛門
11	御呉服御用	衣棚御池上ル町	同人
12	御簾御用	烏丸通少将井町	御簾屋徳助
13	御簾御用	富小路通大炊町	御簾屋修理
14	絹御用	東洞院通三本木四町目	羽二重屋五左衛門
15	御経師	室町通白楽天町	大経師内匠
16	御絵所	室町通鯉山町	法橋了琢
17	御障子張	烏丸通六角下ル町	経師屋久兵衛
18	御障子張	烏丸通綾小路下ル町	経師庄兵衛
19	御畳師	烏丸通六角下ル町	伊阿弥筑後
20	御畳師	油小路通六角下ル町	伊阿弥筑後
21	御畳師	烏丸通御池上ル町	大針丹後
22	御蚊帳師	三条通弁慶町	蚊帳や又左衛門
23	蠟燭御用	御幸町通御池上ル町	蠟燭屋九右衛門
24	御打物御用	御池通森之木町	重明治兵衛
25	紙漉兄弟部	高辻通西洞院東入町	橋本平兵衛
26	紙漉兄弟部	天使突抜船屋町	梅井備前守
27	紙漉兄弟部	高辻通油小路東入町	湯川庄右衛門
28	紙漉兄弟部	同町	湯川清次郎
29	紙漉兄弟部	同町	城戸又右衛門
30	紙漉兄弟部	西洞院通松原上ル町	岡本庄五郎
31	小細工御用	大宮通三条上ル町	大工作左衛門

表 2 「寄宿御免除之分」から抜粋した工芸職人

1	備後表御用	油小路通薬屋町	備後表九郎左衛門
2	結花御用	一条通広橋殿町	結花屋庄左衛門
3	木具御用	一条通広橋殿町	木具屋七郎右衛門
4	木具御用	烏丸通三条殿町	木具屋又左衛門
5	木具御用	烏丸通川端町	木具屋孫左衛門
6	木具御用	烏丸通一条上ル北半町	木具屋久右衛門
7	木具御用	烏丸通一条上ル南半町	木具屋源四郎
8	桶之御用	出水通中出水町	桶屋藤兵衛
9	御蒔絵御用	相国寺鹿苑院門前東町	小幡七之助
10	御畳紙屋	下長者町通藪之内町	城殿和泉
11	御鏡屋	松之下一条下ル町青平左衛門	青平左衛門
12	御塗物御用	烏丸通手洗水町	塗師源助
13	御仏師	寺町通二条下ル町	大仏師蔵之丞
14	御釜御用	三条通竈座町	釜屋信濃

年に船屋が「御用御提灯拝領」を願い出て拝領したのだから、文政 8 年や天保 14 年の相続関係文書と整合するには、その時点で「常式御用」に変わったことになる。ところが前掲、仙洞御所役人宛「乍恐奉申上口上書」（第 2 節）は、明和 4 年から 8 年が経過した安永 4 年でも臨時御用と記していたし、「禁裏御所様御用代銀高」（第 2 節）の取引額も明和 4 年に増えた様子はない。史料では「御道具木地方御用」を主張した文化 4 年 8 月の「乍恐口上書」に常式（定式）御用になっていた可能性を読み取れるだけなので（第 3 節）、現時点では安永 4 年～文化 4 年の 32 年間に立場変化を指摘するにとどまる。

以上、幕初から二条城近くで指物師を営んでいた船屋太兵衛家は、17 世紀後半までに御所修理方役所での入札資格を得、臨時御用を務めるようになり、明和 4 年（1767）には禁裏御所から御用提灯と非常札を付与された。それから御所御用と共に提灯や非常札も相続を繰り返したのであるが、文化 4 年（1807）までに定式御用になった。

その理由として、あるいは安永 3 年（1774）の御所役人処分と共に定式御用であった指物師が連座処分され、船屋の重用が始まった可能性もあるが、裏付けは得られない。ただし、この点に関して、『京都御役所向大概覚書』^{注14)}の「五十 諸役寄宿御免許之事」より、享保元年（1716）当時に工芸職人の役割で御所御用を務め、「諸役免除」や「寄宿免除」（第 1 節）を許されていた者、いわゆる御所御用達をさがすと、表 1 と表 2 のようになる。まず表 1 に、町人義務のうち公役を免除される諸役免除の工芸職人をみると、多様なが指物師の存在は明確でなく、No.31「小細工御用」の大工 1 人に可能性をみる程度である。続いて表 2 に、町人義務のうち寄宿受入れ義務だけを免除された工芸職人をみると、No.3～No.7 に「木具御用」、No.8 に「桶之御用」がある。このうち木具御用は「木具屋」が集団をなしているが、『角川古語辞典』には「木具」が「白木のままの膳や椀、贅沢な調度品」とあり、指物の中でも高度な工芸品を扱っていた者と考えられる。そうすると彼らが安永 3 年の御所役人の処分に連座していれば船屋の重用もあり得るが、想像の域を出ない。それよりも『船屋太兵衛家文書』には、安政 4（1857）10 月の年記で、明確に木具屋と船屋の関係を示す以下の「乍恐奉願口上書」が残されている。

私方前々ヨ御所様御船指物御用相勤罷在候処、此度木具指物職之もの仲ヶ間調立取締之義、当御役所様江奉願書付上ヶ置候様被仰渡之趣ニ而、私儀右仲ヶ間立御願之内江加リ候様、中之惣代室町一条上ル町木具屋新右衛門外二人ヨ掛合有之候得共、私方之儀者、船指物細工おもニ而、私方同家并別家下職之もの別紙之通有之、御用向之節者右同家并下職者江も申付、細工致御用品調進仕罷在候儀ニ而此度仲ヶ間立掛願奉申上罷在候ものハ御所様木具職御用相勤罷在りものニ而、私方職柄共違ひ、木具職又者箱指物細工等致候もの方奉公人等、私方職向ニ相違ひ候儀も無之、細工之事柄違ひ候儀ニ付、右之もの仲ヶ間立御願之内江加リ可申義者差除ヶくれ候様、右惣代之者共江返答置申候、右之仕合ニ而私共別紙同家下職之もの十六人儀者、右仲ヶ間立請願之内江者加リ不申間、乍恐此段御断奉申上候、御憐憫を以右之趣聞届被成下候ハ、如何斗難有可奉存候、以上

西堀川出水町	御船指物師	船屋太兵衛
西堀川竹屋町上ル町		船屋平兵衛
千本一条上ル町		檜本屋弥兵衛
西堀川上長者町上ル町		船屋伊兵衛
同町		船屋市兵衛
同町		大黒屋弥兵衛
西堀川中立売上ル町		船屋卯兵衛
下長者町猪熊出合町		柳屋庄兵衛
千本中立売上ル町		松屋佐兵衛
夷川御峰町角		井筒屋庄太郎
万寿寺烏丸東入町		漆屋七右衛門
同町		津国屋嘉兵衛
万寿寺町高倉西入ル町		漆屋喜兵衛

東洞院仏光寺下町	近江屋市兵衛
烏丸四条通下町	近江屋吉兵衛
建仁寺町五条下町式丁目	山城屋卯兵衛
建仁寺松原上町	井筒屋六兵衛

安政4年(1857)に、木具屋新右衛門ら「木具指物職」の者が「仲ヶ間」組織結成を町奉行所に届けたとある。どのような仲ヶ間組織を目指したのかは明らかでないが、幕末になっても船屋同様に御所御用を務める木具屋は、船屋太兵衛や親戚筋、下請職人(「同家并別家下職」)の取り込みを目論んだのである。これに対し船屋は「船指物細工」が自分達の主な仕事であり、「木具指物職」の木具屋とは「職柄」が違うと主張し加わらないとした。もっともこれは『船屋太兵衛家文書』に調度類や消防道具など多様な工芸品の史料がある事と整合せず、むしろ木具屋とは御所御用に重なる部分があって競争関係にあった筈である。そうすると木具屋が船屋と同じ仲ヶ間に取り込もうとした目的は、御所との関係においては、16~17世紀前半に遡る^{注15)}寄宿免除の木具屋は提灯付与の船屋よりも上格だから、ちょうど御用砂子屋が庶民相手の平砂子屋に対し優位であり続けて御所・幕府相手の仕事を独占したように^{注16)}、御所御用における競争を否定して木具屋に有利な業務分担を目指した可能性もある。

ここで表2から読み取る享保元年当時の寄宿免許の木具屋を○で、また船屋に加入を働きかけた木具屋新右衛門の居住地を☆で地図にプロットすると、図2にみるように烏丸通、特に御所北西に集まっているが、貞享2年(1685)の『京羽二重』^{注17)}では少し南下する烏丸通の下立売から二条通に「長文庫・挟箱」が記されている。

図2 幕末の船屋らと享保元年当時に寄宿免除の木具屋の位置

これに対し「乍恐奉願口上書」より船屋太兵衛家を★、親戚や下請職人を■でプロットすると(建仁寺に近い鴨東の2軒省略)御所から離れている。水舟を扱い川から離れられなかったのかというと、川から遠い万寿寺通沿いにも2軒の■があり、『京羽二重』も同地に「井筒・はしり・水船」と記す。よって図2から読み取れるのは、江戸時代初期から木具御用を務めて木具屋を名乗り、寄宿免除を許されるなどしていた指物師は、御所近くに集まって居住し、江戸時代を通じて御所と深い結び付きがあった。これに対し元々は水船を扱って船屋を屋号とした船屋太兵衛らは、居住地も御所から離れており、幕初には御所との関係も密接ではなかった可能性が高い。

5. 本論のまとめ

本論は、多くの工芸職人が日本の伝統的な建築空間を支えたと考えて、指物師と御所の関係を『船屋太兵衛家文書』に検討した。

京都の工芸職人に関する先行研究は、幕府や御所相手の御用砂子屋が庶民相手の平砂子屋を仲ヶ間に取り込み優位であり続けた事を指摘した。これに対し本論は、17世紀前半から二条城近くに居住、元々は水舟を扱い、船屋を屋号とした指物師が、17世紀後半には御所御用の入札資格の得、臨時御用から随時受注の定式御用へ、また御用提灯や非常札も付与されるなど、江戸時代を通じて京都特有の顧客である御所との関係を深めていき、幕末には御所近くに居住し寄宿免除を許され、御所相手の指物師では上格の木具屋も無視できない存在になったことを明らかにした。もっともこのためには、水舟以外の指物も扱い、木具屋との競争に耐えうる技術を獲得し、価格面でも競争に打ち勝つ努力が必要であったはずである。そこで次論以降でも『船屋太兵衛家文書』から、その経緯や船屋が扱った指物の内容、価格、他の工芸職人の関係などを明らかにしていきたい。

注

- 注1) 川本重雄：寝殿造の空間と儀式，中央公論美術出版，2005
- 注2) 伊藤ていじ：開書・日本建築の手わざ，第1巻，堂宮の職人，平凡社，2000，日向進：近世京都の町・町家・町家大工，思文閣出版，1998
- 注3) 永田恵子・岡本真理子・河田克博・麓和善・仙田満・内藤昌：建築系道具雛形の基本型と発展型，建築系道具雛形の歴史の変遷，日本建築学会計画系論文集，第539号，2001.1、同様各氏のほか高木真人：建築系道具雛形の設計学理，道具設計における寸法体系，日本建築学会計画系論文集，第557号，2002.7
- 注4) 虎屋の五世紀，伝統と革新の経営，株式会社虎屋，2003
- 注5) 資料館紀要，第11号，京都府立総合資料館，1983
- 注6) 安道永：近世京都における絵師の居住動向，日本建築学会計画系論文集，第75巻，第654号，2010.8
- 注7) 資料館だより，第152号，2007.7
- 注8) 杉森哲也：江戸時代の聚楽第跡，豊臣秀吉と聚楽第，文理閣，2001
- 注9) 新修京都叢書，第一巻，光彩社，1967
- 注10) 新修京都叢書，第六巻，光彩社，1968
- 注11) 丸山俊明：京都の町家の軒先板に関する再検討，日本建築学会計画系論文集，634号，2008.12、同：江戸時代後期の二条番衆の寄宿形態，日本建築学会計画系論文集，第640号，2009.6
- 注12) 谷直樹：中井家大工組支配の研究，思文閣出版，1992.2
- 注13) 京都町触集成，第12巻，p24，岩波書店，1987、ほか。
- 注14) 清文堂史料叢書，第5刊，京都御役所向大概覚書，清文堂，1973
- 注15) 上掲，京都御役所向大概覚書，五十，諸役寄宿御免許之事より「諸役免許之初者後陽成院御治世3初利夫3以前者寄宿免許計」とある。
- 注16) 前掲，資料館紀要，第11号
- 注17) 新修京都叢書，第六巻，光彩社，1968

(2010年8月6日原稿受理，2010年9月29日採用決定)